

「ハロンドウの箱 第2話 「慶留間」で何が起きたか」

2007.6.19付

上原正徳

乙第4号証

ーイスラエルの東端に“生”を拒絶する塩の湖“死海”がある。その死海の南東岸にまるで巨大な戦艦と見迷うマサダ要塞跡がある。要塞の周囲には数百メートルの断崖聳り立ち、正に難攻不落と見える。マサダ要塞は紀元前四世紀ヘロデ王が宮殿を創り、要塞化し、その後ローマ軍とイスラエル軍が覇権を争った舞台だ。紀元七〇年ローマ軍はエルサレムを占領し、最後のイスラエルの要塞マサダを攻略することになった。しかし、二年間もマサダを包囲しながらも女、子供を含めてわずか千人のユダヤ教徒に対し、一万五千人の大軍から成るローマ軍は歯が立たない。ローマ兵が岩山を登っても、次々、突き落とされたのだ。ついに司令官は更迭された。新任の司令官ジャイル將軍は断崖の一角に山のように石や土を運び、岩山の頂上まで積み上げ、傾斜路を造った。紀元七三年四月十五日、ローマ軍は傾斜路を登り、マサダの頂上に攻め寄せた。しかし、千人のユダヤ教徒らは自ら命を絶つことにした。“集団自殺”を決行したのだ。敵の死体の山を見て、叫んだ。「なぜだ。なぜなんだ！」ー

今、沖縄の新聞は「軍命による集団自決」が教科書から削除されようとしている問題で国に対して厳しい批判を展開している。この問題は渡嘉敷の海上挺進第三戦隊戦隊長であった故赤松嘉次さんの弟と座間味の海上挺進隊第一戦隊戦隊長であった梅澤裕さんが「自決命令を出していない」として、その名誉を傷付けたとされる「沖縄ノート」の著書大江健三郎さんと岩波書店、そして新崎盛暉さんを大阪地裁に訴えたことに起因する。“集団自決”が行われた慶留間、渡嘉敷、座間味で一体、どのようにして“集団自決”が始まり、終わったのか、そして、なぜ集団自決が起きたのか、これから詳しく検証しよう。読者の多くは自決命令があったかなかったか既に結論を出しているはずだ。この物語を読む前に、読者は頭を白紙にする。つまり結論は最後に下すことだ。いかなる結論を下すにしても、検証の前に結論があつては、真実は見えてこない。先ず、慶留間と渡嘉敷で住民の“集団自殺”を目撃したグレン・シアレス伍長の証言から始めよう。シアレス伍長は第1話でも重要な証言をしてくれた。第77師団306連隊第1大隊A中隊の歩兵である。

グレン・シアレス伍長は語る

一九四五年三月二十六日、潮が満ち、ついに突撃命令が出ると、水陸両用車の列は横一線に並び、海岸に向かう。そのすぐ後ろから小型LST艇がおれたちの頭越しに慶留間島の海岸線と村落に向けロケットを発射し、おれたちを援護した。海岸から五百メートルほどの距離まで来ると、そのLSTはくると反転し、戻ってゆく。上陸第二波陣に道を開けるためだ。今やおれたちは自分で自分の身を守らなきゃならない。案の定、日本兵のやつらが穴の中から出てきて、軽機関銃をぶっ放し始めた。思い出したように機関銃が一、二発、水陸両用車の鉄板にぶつかり、はじけてゆく。おれたちは五〇口径の重機関銃をむちゃくちゃにぶっ放した。敵の機関銃をおとなしくさせるためだ。この上陸作戦は岩礁を避けるため、満潮時を選んで行われたから、水陸両用車が陸に揚がると、目の前に石垣の堤防が立ちふさがっていた。それにしても見事な石細工だ。石垣は所々、砲弾で爆破され、崩れ落ちていた。おれたちは逃げる日本兵を追って、崩れ落ちた堤防の間を通り抜けて、

左手の村落にでた。日本軍は村落から退却していた。やつらを山に追い詰めろ、という命令が下った。住民がよく利用する山道を見つけると、おれたちは登って行った。頂上に達するまで何の抵抗もなかった。頂上に着くと、背後から攻撃を受けたが、大したものじゃなかった。この頂上から続く尾根の向こうで猛烈な銃撃戦が行われていた。

慶留間島の山頂から続く尾根の向こうで猛烈な銃撃戦が行われていた。「救援を頼む」との無線連絡が入ってきた。現場に向かう途中、五、六人の日本兵がおれたちの方に逃げてきたところを、やつらが気付く前に撃ち殺した。一時間ほど何事も起こらなかった。山腹に洞くつを見つけた。そこには島の住民が何人かいた。おれたちが強かんして、虐殺すると信じたに違いない。彼らは自分の子供たちをナイフとナタで殺し始め、そして自殺し始めた。みすばらしい着物を着た老人（男）がはだしておれたちの方に向かって走ってきた。手には鉄の銚（もり）を付けた竹やりを握っている。日本軍が老人に槍（やり）を支給したに違いない。老人は何か叫びながら、突進してきた。自動小銃が火を吹き、その老人は倒れた。その時、ようやく日系アメリカ兵が現場に到着し、日本語で壕の中の住民に「やめる、やめる」と説得した。ようやく惨劇が終わった。今でもおれのまぶたの裏に焼き付いて離れないのは、あの若い母親の顔だ。自分の腕の中で死んでいる子供を見つめる母親の目。何てことだ。殺すことなんてなかったんだ。民政班から、鉄条網で囲われた収容所を用意したので住民を村に連れ戻せ、との命令が下った。おれは九十歳くらいのとても小柄な老女の襟（えり）首を掴（つか）んで、山道を下った。その老女はひざまで届くジャケット（ちゃんちゃんこ）を着、黒いだぶだぶのズボン（もんぺ）をはいていた。途中、おれたちは日本兵の死体のそばを通った。こいつは米袋を担いでいる際に撃ち殺されたらしい。銃弾で袋が切り裂かれ、米粒が道路に散乱していた。老女は俺の手を振りはらって、泣き喚（わめ）きながら米粒をかき集め始めた。死体なんて全く眼中にない。村に着くと民政班は収容所に配給食糧のケースと飲み水の缶を積み上げ、住民のためのテント設営の最中だった。日本軍に虐待されたフィリピン住民はなんと言うだろう。まさに雲泥の差の待遇だ。おれたちはもう一度山に入り、日本兵を捜すことになった。山から見下ろすと、海岸線に野戦砲が設置され、ちょうど一マイル離れた島に砲弾を撃ち込んでいる。あの島が、明日、おれたちが上陸する渡嘉敷島だ。三月二十七日、夜明け前、またおれたちA中隊の出番だ。A中隊は渡嘉敷島の最南端の海岸線に音も立てず上陸した。辺りはまだ暗い。俺たちの役目は、午前八時の上陸前艦砲射撃までに阿波連村落の裏側の尾根を占拠することだった。つまり、艦砲射撃を避けて逃げてくる日本軍を待ち伏せしようという狙いだ。そううまくいくはずはないと思ったが、実際その通りになった。三月二十七日予定通り、おれたちは午前八時、目的地に到着し、着色発煙手投げ弾を爆発させ、上空の偵察機におれたちの位置を知らせた。すぐに、艦砲と野戦砲が発砲し、砲弾が眼下の阿波連村落に降り注いだ。しばらくすると、退却する日本兵らが山を駆け上がってきた。およそ半時間、日本兵らは飛んで火に入る夏の虫とばかり、狙い撃ちにされた。二百人のジャップをやっつけたとだれかが言った。おれが見たのはせいぜい五十人ほどだ。おれたちの損害は二、

三人の戦死者と五、六人の負傷者だけだった。 ※(注) これまでのいかなる戦記にも渡嘉敷の最南端の浜(ヒノクシ)にアメリカ軍が上陸したことは書かれていない。ところが昨年筆者が渡嘉敷村の金城武徳さんから入手した「渡嘉敷第三戦隊の陣中日誌」に「三月二十七日…第一中隊は阿波連より撤収するも渡嘉志久岬の敵に阻止され、突破すること得ず東方山中に潜伏…」との記録を発見した。第三戦隊はアメリカ軍が裏をかいて、渡嘉敷最南端から闇(やみ)を突いて上陸し、待ち伏せしたことを知らなかったのである。「山を下りて阿波連の村を確保せよ」との命令を受けた。山を下りる途中、小川に出くわした。川は干上がり、広さ十メートル、深さ三メートルほどの川底のくぼみに大勢の住民が群がっている。俺たちが姿を見せると、手投げ弾が爆発し、悲鳴と叫び声が谷間に響いた。想像を絶する惨劇が繰り広げられた。大人と子供、合わせて百人以上の住民が互いに殺し合い、あるいは自殺した。慶留間の時と同じだ。規模がすさまじい点が違うだけだ。俺たちに強姦され、虐殺されるものと狂信し、俺たちの姿を見たたん、惨劇が始まったのだ。年配の男たちが小ちゃな少年と少女たちの喉(のど)を切っている。俺たちは「やめろ、やめろ、子供を殺すな」と大声で叫んだが、何の効果もない。俺たちはナイフを手にしている大人たちを撃ち始めたが、逆効果だった。狂乱地獄となり、数十個の手投げ弾が次々と爆発し、破片がビュンヒュン飛んでくるのでこちらの身も危ない。全く手がつけられない。おれたちは「勝手にしやがれ」とばかり、やむなく退却し、事態が収まるのを待った。A中隊の医療班が駆けつけ、全力を尽くして生き残った者たちを手当したが、既に手遅れで、ほとんどが絶命した。一日か二日後、工兵隊がやって来て、川岸に爆薬を仕掛け、惨劇の現場を埋めた。数ヶ月後、故郷へ帰る途中、俺がカルフォルニアでヒッチハイクをしたとき、年輩の男が拾ってくれた。その時、彼は俺がオキナワ戦に参加したことを聞くと、自分の息子はトカシキという島に行った将校だが、息子の話では、豪雨の後、無数の人骨が川を流れ落ちて来たそうだが、アメリカ兵が多数の住民を虐殺したせいらしい、と語った。俺たちが殺した。とは参ったね。もちろん、本当のことを話してやった。